
ただ今参上！俺達は日本最強暗殺組織ラグラスだっ！！～覚醒編～

岡崎輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ただ今参上！俺達は日本最強暗殺組織ラグラスだっ！！～覚醒編～

【Nコード】

N6600Y

【作者名】

岡崎輝

【あらすじ】

遂に新章突入でタイトルも日常編から覚醒編に！

ある日ラグラスに送られてきた不思議な形をした6個の宝石。そして傍らに置かれた『新の力を呼びさませ』のメッセージ。これは一体！？

キャラ設定？ 三上零真（前書き）

また新作です！どれだけ作れば気が済む僕！

今回は初のオリジナルです。ちょっと自信ないかも…

とりあえず主人公設定です！

キャラ設定？ 三上零真

名前）三上 みかみ 零真 れいま

性別）男

身長）175？

体重）62kg

年齢）16歳

容姿）濃い青色の髪にマンダリンオレンジの切れ長の瞳。黙つてけば美少年。

属性）雷

特異体質）？

武器）？

所属）日本最強暗殺組織『ラグラス』

地位）雷の幹部でクラス『？』

補足）親が先代のラグラス幹部だったため、幼いころからラグラス城に居て、10歳のころ入隊した。強力な特異体質を持っていたこともあり、16歳の春から見事雷の幹部として戦うことになった。幹部の中では一番常識人。

キャラ設定？ 三上零真（後書き）

これが主人公です！

ちなみに、？というのは、話に出てきたら追加しようと思っているだけです。一応考えてます！

す！

しばらくメインキャラの設定になると思います。

ちなみに、属性に関しては、某ダメダメ少年がマフィアのボスになるヤツとは一切関係ありません。

ません。

明日には大量更新で、ほかのキャラの設定も更新し終えたいと思います。

キャラ設定？ 龍城優斗

名前）龍城 優斗
りゅうじょう ゆうと

性別）男

身長）173？

体重）56kg

年齢）17歳

容姿）肩に着くかつかないか位の水色の髪。目は赤紫色のツリ目。

属性）水

特異体質）？

武器）デザートベリアル（二丁銃）

所属）ラゲラス

地位）水の幹部で幹部のリーダー。クラスは『ガンマン』

補足）過去最年少の幹部リーダー。愛斗の双子の兄。銃の腕は百発百中でその道では結構有名。明るくて単純な性格。少し俺様。でもリーダーだけあって統率力は並ではなく、いざというときはちゃんとやる。普段はろくなことを思いつかない。

キャラ設定？ 龍城優斗（後書き）

次もキャラ設定です。

キャラ設定？ 龍城愛斗

名前）りゅうじょう龍城 あいと愛斗

性別）男

身長）173？

体重）56kg

年齢）17歳

容姿）優斗とほぼ同じだが、優斗がツリ目気味なのに対してややタレ目。

属性）風

特異体質）？

武器）？

所属）ラグラス

地位）風の幹部でクラス『？』

補足）優斗の双子の弟で、兄とは違い、優しくてしっかりしている。兄思い。超アナログ派で機械音痴。だけど情報屋としても活躍している。作者的に一番キャラ崩壊を起こしそうで怖いです。幹部の中では（ここ重要）常識人。

キャラ設定？ 龍城愛斗（後書き）

キャラ紹介オンリー（＾p＾）

キャラ設定？ 猫崎希望

名前）猫崎^{ねこざき} 希望^{きぼう}

性別）男

身長）152？

体重）42kg

年齢）15歳

容姿）銀髪で朱色の瞳。童顔で見た目はクール。いつも黒の猫耳フードを被っている。

属性）土

特異体質）？

武器）チンクエディア（投げナイフ）

所属）ラグラス

地位）土の幹部でクラス『？』

補足）常にセリフが棒読みで、楓を怒らせる事に関しては天才的。楓とは喧嘩友達で、いつも喧嘩してるけど、一番信用してる。超女嫌い（月夜は平気）。名前の割に希望を持っていない。

キャラ設定？ 猫崎希望（後書き）

主要キャラは後三人です。

キャラ設定？ 重鬼炎魔

名前）重鬼じゅうき 炎魔えんま

性別）男

身長）163？

体重）48kg

年齢）16歳

容姿）赤茶色のボサボサヘアーにやる気のなさそうの黄土色の瞳。

属性）炎

特異体質）『二重人格』 ↓武器を持つと普段のおとなしい性格から、クールで好戦的になる。

武器）トライデント（三叉槍）

所属）ラグラス

地位）炎の幹部でクラス『？』

補足）普段は内気で気弱だけど武器を持つと、本人の意識を無視して性格が変わる。やる気がなさそうだけど、結構真面目で、律儀。残念な幹部達に冷静な突っ込みをする事もある。

キャラ設定？ 重鬼炎魔（後書き）

後二人です！

キャラ設定？ 秋神楓

名前）あきがみ 秋神 かえで 楓

性別）男

身長）148？

体重）36kg

年齢）16歳

容姿）薄い茶髪で毛先が跳ねている。瞳はダークが掛かった濃い緑。ツリ目でもタレ目でもない。

属性）光

特異体質）？

武器）唱魔棍パードベンテ（棍）

所属）ラグラス

地位）光の幹部でクラス『棍術師』

補足）天真爛漫という言葉がぴったりの奴。頭はいいけどバカ。超天才術師でたびたび命を狙われる。希望以上に童顔で、零真に小学生に間違われた。時々意味ありげなセリフを言う。常にお菓子を食べているけど、太る気配は一切なし。『棍術』という体術を完璧に

使いこなす。

キャラ設定？ 秋神楓（後書き）

後一人！

キャラ設定？ 黒鐘月夜

名前）黒鐘くろかね 月夜つきよ

性別）女

身長）164？

体重）軽い

年齢）？（恐らく10代）

容姿）黒髪ロングのパツツンで、ツリ目がちな銀色の瞳。右目を包帯で隠している。

属性）闇

特異体質）？

武器）？

所属）ラグラス

地位）闇の幹部でクラス『？』

補足）絵に描いたような美人だが、性格が色々と残念なため恋愛の対象には絶対ならない。でも、嫌われているわけでもない。むしろ好かれている。実力は幹部の中でトップクラスらしいが戦っている姿を見た者は誰もいない。任務にはいつも一人で行く。封じられた

右目には秘密があるらしい。

キャラ設定？ 黒鐘月夜（後書き）

やっと終わったよキャラ紹介。正直疲れた。いろんな意味で（^ p ^）

次回から本編に入ります。暗殺者には見えなし思えない平和で残念な日常を書い

ていきたいです。

任務1 それが俺達の日常です。

ここは日本最強暗殺組織『ラグラス』本部の幹部専用会議室。

今ここには俺を含め幹部全員が集まっている。

「……で？今すぐに緊急で伝えなければいけない話とは何だ優斗」

沈黙に耐えきれなかったのか、闇の幹部である黒鐘月夜こと月夜が水の幹部で幹部リーダーである龍城優斗こと優斗に尋ねる。

「ああ。今からその事に付いて話す」

優斗は至って真面目な顔をして幹部達を見まわした。

「…まず、オレ達の職業は何だ？」

「？そりゃ、暗殺者でしょー？」

何を今更、と言いたそうな感じで答えたのは土の幹部、猫崎希望と希望。

「…ああ、その通りだ。それで、今日お前たちを呼び出したのはだな、その事に関して、果てしなくビックリな事に気付いてしまったんだ…」

「…果てしなくビックリな事…って何？」

「って言うかいつまでもつたいぶってるのさ！早く本題に入ってよ！」

そう言ったのは炎の幹部、重鬼炎魔と光の幹部の秋神楓。

…にしてもやっぱり今回は引つ張りすぎだ。まさか作者の奴『平和な暗殺者』とか言うタグつけておいて一話目からいきなり物騒なことにするつもりか！？↑世界観壊すなB y作者

「ああ…その『暗殺者』っていう職業に付いた俺達って…」

更に真剣な顔つきになる優斗。俺達も少し真剣になる。↑少しかよ！B y作者

「実は犯罪者なんじゃないか！？日本国憲法は何のために！？」

「……………今更！？……………」

優斗以外の幹部6人の声が綺麗に重なった。いやだって今更過ぎだろ！裏社会の人間になった時点で着付け！！このバカリーダーめが

！！

「いやだって犯罪者だぞ！？罪を犯した者なんだぞ！？しかも犯罪者の集団があるんだぞ！？こりやもう警察沙汰所の問題じゃないだろ！誰だよ日本は世界で五番目に平和な国だっていった奴！！噓つきだから泥棒になっちまえホゲー！！！！ツ！！！！」

「兄さんが壊れた！？」

「って言うかなんかもー色々今更過ぎじゃないですかー？」

「というか緊急で幹部全員集めた理由とはこれだったのか？この腐ったミカンが！」

「…なんかもう…フォローのしょうがないよ優斗君…」

「零真…僕この人がリーダーやってる暗殺組織やダ…」

「その気持ちはとてもよくわかるよ楓。くそっ俺だって親がここの先代幹部じゃなきゃこんなとこいねーよコンチクショウ！！」

「おい零真キャラを保て！一話目からいきなりキャラ崩壊を起こす気かお前は！」

「…………お前が言うなバカリリーダー！！！！！！……………」

「んなつ！？」

…バカなリーダーに振り回されて毎日がギャグまみれの日常…それ

が俺達の日常です。

任務1 それが俺達の日常です。(後書き)

こんばんは岡崎です。どうでしたか？ちゃんとギャグになってましたか？

この小説は毎回こんなギャグモノになると思います。

あ、後タイトルの『任務』は『ミッション』って読んでください。

そっちの方がカッコいいじゃないですか、気分的に。

ではまた次回にお会いしましょう！

感想、評価などもよろしくです！

では、(^ p ^) /

▼作者は去ったようだ↑なんとなくRPG

任務2 『そう、を自由に〜とびたいな〜』…とりあえず何かの幕開は

ここはラグラス本部の幹部棟の中にあるリビング。

二話目だというのに俺達はやることもなくくつろいでいた。

「零真ー暇ですーなんか暇つぶしになる物はありませんかー？」

「ねえよ。あつたらとつくにやってるよ」

ちなみに今ここに居るのは俺、月夜、希望の三人だけだ。

双子と炎魔は任務。楓は…どうせ寝坊だろう。

「？零真、確か昨日『マルオカート』とか言うよく分からんゲームやってなかったか？あれをやったらいいんじゃないか？」

月夜が最もな提案をしてくる。でも…

「それは無理なんだ。月夜」

「？昨日やりすぎて飽きたとかそういうことか？」

「いや、別にそういう訳じゃないんだけど…」

「それはですねー月夜先パイ。昨日どこぞのロリシヨタ先輩が自分が一度も勝てないからってブチ切れてディスク割っちゃったんですよー」

その通り。ちなみに希望が言うロリシヨタ先輩というのは楓の事だ。

「ガキかあいつは…」

「誰がガキだって!？」

「うおっ楓いつの間に!？」

「『なんか暇つぶしになる物ありませんかー?』位から」

「ほぼ最初じゃねーかよ!」

「え、じゃあ先パイずっと黙って聞いてたって事ですかー?…うわーヘンターイ」

「なっ…僕は変態じゃないよ!会話に入るタイミングが分かんなかっただけだよ!」

「…所で何の用なんだ?息が荒い所から見て随分急いでいたみたいだが…」

「そう言えばそうだな。何かあったか?」

「まさかのしょんべん小僧に昇格ですかー?先パイ」

「んなワケねーだろこのネコチビ!…これを見てほしいんだ」

そう言って楓が俺たちに見せたのは

「『『トラえもん』?』」

世にも有名な漫画家『富士子・E・富士男』が、書いた二十一世紀に対するあこがれの漫画『トラえもん』だった。

「…まさかお前いい年して『プラコプター』でお空を飛びたいな」
とか言うんじゃないだろうな…? 引くぞ…?」

「うわー月夜先パイのいう通りだったら先パイ本格的に痛い子ですねー（笑）」

「違うよ!…ってか（笑）ってなんだよ（笑）って!」

「普通に『笑う』って意味じゃないのか?」

思ったことを言ってみた。いや、本当にそういう意味なんだよな?

「そんなことも知らないなんて先パイ頭大丈夫ですかー?（笑）」

「それとも忘れたのか? 若年性アルツハイマーか?（笑）」

「うっ…うわーん！！零真助けてー！！ネコチビと月夜がいじめてくるー！！！！」

「そこで俺に振るか！？」

「ほかの誰に振れっていうのさ！！」

「…なんか悪かった。とりあえず悪かった」

「「「とりあえず！？」「」」

変な所で突っかかってくる奴らだった。息ひったりだし。

「…まあ、少し言い過ぎたのは反省している。悪かったな」

「うっ…もういいよ…」

「うわー先パイもしかしくなくてもマジ泣きですかー？www」

「「お前も少しは悪びれるよ！！」」

思わずハモって突っ込む俺と月夜。本当に可愛くない後輩だった。

いや、幹部になったのは俺の方が後だけど。

「…で？結局何で来たんだ？」

とりあえずこの危険な流れから話をそらす。もとはと言えばこう言う話だった気もするし。

「うん。実は僕、この漫画でとんでもなことを気付いちゃったんだよ！」

「…この流れに既視感を覚えているのは私だけか？」

「だいじょーぶですよ先パイ。自分も感じてますからー」

「…何だか凄くいやな予感がするぞ…」

任務2 『そうを自由にびたな』…とりあえず何かの幕開は

この話は何話かにわたって続くと思います。

トラえもんは…何が元ネタか分かりますよね？マルオカートも。

感想、評価もお願いします！

任務3 子供の憧れはホラーでした。 とうか全国の子供向け漫画を描く漫画家

「まずここを見て!」

そう言つて楓が開いて見せたのは、トラえもん御一行が『プラコプター』で空を飛びながら楽しそうにはしゃいでいる絵が載っているページ。

…うん。 やっぱり嫌な予感がします。 楓先輩。 ↑何故か先輩呼び。

「? やっぱり先パイ『トラえもん』の世界に憧れを持つてたりするんですかー?」

「無視）みんな、おかしいと思わない?」

「俺は特に…」

「自分も思いませんよつて言つかさつき無視しましたね先パイ」

「いや…私は思つぞ」

「「え!?!」」

俺と希望がハモつて驚く。 月夜は割と大雑把だからスルーするか、
「何を言っているシヨタ子」とか言つて楓の頭をハエ叩きで叩くか
と思つてたのに…

「やっぱり！月夜もそう思うよね！」

「ああ。超×100不本意だが、今回限りはお前の味方で仲間だ」

「どんだけ否定するのさ！…まあ、とにかくこのページ…いや、この作品自体おかしいと思っている人もたくさんいるのさ！分かったか腐った蜜柑共！ざまあ無いな！」

これほど楓がウザいと感じたことは無かっただろう。今なら殺れる気がする。マジで。

「究極にウザいですよロリショター。…で、何がおかしいんですかー？月夜先パイも」

「（…味方でもウザかったぞショタ子）それなら今から説明する。…楓、例のブツを」

「了解ですぜ、アニキ」

「どこのヤクザだお前ら！？」

「」「」「」

「もういいです…」

「例のブツってなんですかー？って言うかあんたら事前に打ち合わせでもしてたんですかー？」

「駄作クオリティーのおかげで打ち合わせしなくて済むのさ！」

「さいですか…ってか何なんですかその少年漫画の様な笑顔はー」

「…随分前ふりが長かったが本題に入るぞ。いいな？楓助手」

「オーケーです月夜博士！（あれ？言い出したのは僕なのに何で助手なんだろう？）」

気にしたら負けだよ、楓。

「心読まれた！？」

お前も読んだな。

「…で？本当に何なんですかー？さっきから全然話が進んでないんですけどー？」

「ああ、そうだったな。ではまずあり得ない所その1！」

「「そもそも『トラえもん』という存在があり得ない！」」

そこいっちゃう!?

「先パイ。それは原作者の為にも言わない方がいいと思いますよー?」

「大丈夫だつて。死んでるから」

「それにあり得ないのは本当だろう?いくら二次元の産物とは言え、現代の科学でする事が不可能だからと言ってありえないようなこと漫画にして純粋な子供の心を弄ぶ。そして作者は自分の書いた『あり得ない未来』を本気で信じる子供達を見て陰で嘲笑う。最悪だな人として」

「人として最悪なのはお前の頭だ!何だよその最悪な作者像は!」

後輩だけでなく先輩まで捻くれていた。

……ちなみにこの後、月夜による子供の心を踏みにじりまくる発言と、楓の哲学的な解析により出た結果。(その253まで続いた)

『幼い子供に支持されるアニメほどホラーで性格の悪いものは無い。子供アニメの放送は禁止すべき』

……ホラーで性格悪いのはお前らで放送、というか公開(?)を禁止するべきはこの小説だ、とはこの時の俺はともじゃないけど言えなかった。

任務3 子供の憧れはホラーでした。 といつか全国の子供向け漫画を描く漫画家

昨日これ更新したと思ってたのに出来てなかった…すみません！

トラえもんの話は今回で終わりです。

次回は…みんな大好きボーカ・イドの事を書こうかなーと思っています。
ます。

感想評価待ってます！

任務4 『第一回ボーカルロボット名曲視聴会』、始まりまーす。

「聞いてくれ皆の衆」

いつの時代だよ、と思わず突っ込みたくなるセリフを吐いたのは、珍しく月夜だった。

「月夜さん…どうしたの？」

月夜以外の幹部全員の気持ちを代弁してくれたのは炎魔。

ちなみに今日は全員任務が無いので、皆でリビングでくつろいでいた。

「嫌、先日ネットサーフィンをしていて見つけたのだが…最近の文化の進みようを目の当たりにしてしまっただけ…」

「？何を見つけたの？」 ↑ 愛斗

「確か…『ボカロ（ボーカルロボット）』とか言う奴だった…」

「あ、自分それ知ってますー。確か『初音ミク』とかの音源製作ソフトで好きなように歌わせたりしゃべらせたり出来るんですよねー？」

「すげーな最近の文化！」↑優斗

「…（カアアアアアッ）」

「？先パーイ？なに赤くなっちゃってるんですかー？あ、もしかしてモテないからってボカロに愛の告白させようとして、妄想しちゃうてたりー？」↑楓はモテモテ設定だよ！（今考えた）

「んなワケねーだろネコシヨタ！（ビュッ）」

「ゴン！」ちょ…先パーイ後頭部棍で思いっきり殴るのやめてくれませんかー？リアルに痛いんですけどー（シュッ）」

「グサッ）ギャー！ー！イテー！何ナイフ投げんのさこの幹部（仮）！」

「先パーイその（仮）って言うのやめてくれませんかー？」

「ヤダ」

「…死ねよロリシヨタ（ボソッ）」

「聞こえてるよ！ホントに可愛くない後輩だな、君は！」

「可愛くなくて結構です（通常の5割増しで棒読み）」

「むかつくっ…！」

「勝手にむかついてて下さーい」

「うわー！ん！希望のバカアホマヌケー！」

「小学生かお前は」↑俺と月夜

「…って言うか何気に先輩に本名呼ばれたのって今が初めてですよー？ファーストコンタクトがこれって地味に傷つくんですけど」

意外と健気で純粋だった。ファーストコンタクトの使い方間違ってるけど。

「…と、とにかく、僕の顔が赤くなったのはその、決して如何わしい事を考えているからではなく、その…自分が歌う訳じゃないし、誰が創ったかなんて分かんないから、自分じゃ恥ずかしくて言えないようなことも平気で歌わせることも出来るって思うと…微妙に恥ずかしくて…」

「なーる。先パイの意見なんとなく分かりますー」

確かに自分か歌う訳じゃないから、三次元の人達がとてもじゃないけど歌えないような歌詞の歌を歌わせることも出来る。

「でも、実際にそんな歌歌わせる人いるのかな？」

「…じゃあ、実際に曲を聞いてみればいいんじゃないかな？」

「それもそうだな…皆のもの、異論は無いな？」

だからいつの時代だよ、と思いつつ、俺達は頷いた。

「では始めるぞ」

こうして『第一回ボーカルロボットの名曲視聴会』が始まった。

任務4 『第一回ボーカルロボット名曲視聴会』、始まりまーす。(後書き)

次回は実際に存在する曲をそのままの曲名で出しちゃおうかな、と思います。

って言うかボーカロイドをボーカルロボットって…自分のセンスが残念だ！

感想評価、待ってます！

任務5 結論を言つと機械が歌を歌ってくれるって便利ですよ。後新章に付い

「まず1曲は、『ドキドキ 百合学園』」

「タイトルからして危なそうだなおい！」↑俺

「って言うか、それってそこまで有名じゃなかったと思うんですけど」

「ネットサーフィンしてる時見て、いろんな意味で（爆笑）状態になっちゃったもんでつい」↑輝（笑）

「いいから聞くぞ！」

「曲を聴いています」

「聴き終わりました」

「……ぎゃあああああああああああああああ
あ………」

「何だよお姉さまって！って言うかレス！？レスレスレス…ぎゃあ
あああ！ひぎゃああああ！むぎゃあああああああ！おかしい！間
違ってる！同性愛なんて…神は何の為にアダムとイブをつ…！とに
かくオレは認めませんんっ！」↑優斗

「ヤダ…怖い…やめてストーカー！後輩を隠し撮りして写真見て二
ヨニヨ…ヤダ！気持ち悪いです！神様はなぜ同性愛という物を生み
出したのっ！？って言うか僕何かしました？神が気に食わない何をし
たって言うのさあああああああああ！！！」↑愛斗

「この痴女！色情狂露出狂ビッチあばずれ生まれながらの売春婦歩
く公衆便所リアルダッチワイフ動く猥褻物淫乱力レイドスコープ雌
豚！頭の中が妄想とレイプで埋め尽くされてる変態豚め！…いや、
少し言い過ぎたな。ああ…我ながら本当に言い過ぎた…百合がどれ
だけ世界にとって有害な物質であるかを完璧にすることなど例え百
万言を尽くしても不可能であることは明白だったのに、無駄に言葉

を重ねてしまった」↑楓

「本当ですよ先パイ。さっき言ったバカだのアホだのウザいだの低能だの無能だの存在価値がないだのウスノロだのゴミだのハエ以下だのウジだのゴキブリだのうんこだの動く汚物製造機だの使い捨てダッチワイフだのという発言はー本当に無駄にもほどがあるんですよー。百合に対する罵詈雑言で酸素を消費するなんて地球に対して非常に申し訳ないと思いますよーこの世で最も罪深い酸素の使い方ですー。アメーン」↑希望

「（ショッキング過ぎて放心状態）」↑炎魔

「ふむ。予想通りの反応だな」

「鬼かお前は」

「にしても楓と希望に関しては綺麗なまでに悪口を並べてくれたなあそこまで行けば神だと思うぞ。私は」

「にしてもどうするんだ？みんなヤバい感じだぞ」

「それもそうだな。…そう言えば零真。実はこの小説、もうすぐで日常編終わるらしい」

「マジで！？この小説始まる前に日常編二十話位は書くって作者が一人で宣言してたぞ！？」

「うむ。そうなんだが、どうもこの小説、見てくれている方が限りなくゼロに近いみたいでな、新章行つてシリアス要素入れなきゃいつかにじファンから追放されるのではとか作者が言い出して」

「バカ過ぎだろ作者！」

「という訳で、後3話位したら、タイトルが『只今参上！俺達は日本最強暗殺組織ラグラスだっ！』日常編』から『只今参上！俺達は日本最強暗殺組織ラグラスだっ！』覚醒編』になるぞ。テストに出るからな。ここ重要」

「出ないし重要じゃねーよ！ってかさつきからセリフおおすぎじゃね！？地の文全然ないぞ！？」

「作者の技量の問題だ。ちなみに次回から地の文は作者のナレーションで覚醒編からセリフの前に誰が喋ったかの表示がつけくらしいぞ。作者の技量の所要だ」

「作者サイテー……！！この駄作者めが！」

「後、『作ってて思ったんだけど楓って全然天真爛漫じゃないよね。リボーンのランボさんみたいになってるよね。ちょーウザいよね。あれ？製作前の段階では健気で純粋な天才美少年って設定だったのに。あれ……？』ということを作作者が独り言で言ってたぞ」

「作者マジ自害しろ……！」

「てな訳で今回は終わりだ。結論はタイトル通りだ」

「ってか、久しぶりの更新の癖に手を抜きすぎじゃね？色々と」

作者「久しぶりだから手抜きしたくなるのさ」

「なんか出てきた！つて言うか音符付けんな鳥肌立つ！つて言うか言い訳になつてねえ！」

作者「君、『つて言うか』つて言い過ぎだよ」

「お前が言わせてるんだろ!？」

作者「えー今回は約1週間、嫌それ以上放置してすみませんでした」

「無視！？つかもうコレ後書きじゃね！？」

作者「今回で日常編終わりです！え、終わるの早いって？ネタがね——」
「なんだよコンチクショ——！！！！！」

「何読者に当たってんだよ！」

「とにかく今回で日常編は終わり。次回は設定集だそうだ」

「設定集？なぜそんな物を」

「次回から遂にシリアス微妙に突入して、暗殺者らしくバトルが入るかららしいぞ」

「マジでバカだな作者！てな訳で次回も」

「お楽しみに」

作者「感想や評価もお願いします！全く来なくて連載打ち切りしよ
うか本気で考えているので…」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6600y/>

ただ今参上！俺達は日本最強暗殺組織ラグラスだっ！！～覚醒編～

2011年12月3日18時53分発行